



ICT と人間の未来

調査理事 花澤 隆

2008 年 10 月、「科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム」(STS フォーラム)というところで「情報通信技術 (ICT) の人類への影響」という題で議論をする機会を得た。この題名を見た瞬間、カール・ヤスパースの「原子爆弾と人間の未来」という論文を思い出した。学生時代にドイツ語の教科書に指定されて、大変苦勞して読んだという思い出。もちろん内容など覚えていないが、「原子爆弾」を他の技術に置き換えても意味を持つような普遍的な内容であったと記憶している。原子爆弾がキュリー夫妻以降の原子物理学の一つの成果と考えるならば、ICT の成果にもこのような、地球を破滅、あるいはそれに匹敵するような状況に導くようなものが将来出現する可能性はないのだろうか。そんな疑問を持ってフォーラムに参加した。

プライバシーの問題、セキュリティの問題、情報の信憑性の問題など ICT の陰の部分に関してはいろいろな問題が議論されているが、原子爆弾級の問題になるものがあるだろうか。コンピュータに不正に入り込んでミサイル発射などミステリー小説に出てくるようなことも考えられないことはないが、そうしたことは技術の進歩が解決してくれると楽観視している。心配なのは人の心に作用、影響するような問題だ。今でも特定の国ではマスメディアや Web の情報をコントロールしている。民主主義の浸透した今日、今更全体主義の再来ということはないのかもしれないが、最先端の ICT を駆使して、世界を支配する独裁者が現れたり、個人の行動はいつでもどこにいても監視され記録され、常に行動に関する指示をされるということはないだろうか。更には、情報はたくさん提供されるが、特定の思想に偏っているということも危惧される。

ライフログに行動支援。個人 ID の常時発信にセンサネットワーク。街中のあふれるばかりの監視カメラに画像理解技術などなど。道具立ては着々とそろっていく。携帯電話で“行動支援”を受けて振り込め詐欺にあったり、“リコメンデーション”を信じて売れ残り商品を買わされたり、滅亡に向けた流れは始まっているかにも見える。

科学技術研究の成果には常に陰の応用が付いて回る。しかし科学技術の研究者自らが、その研究成果がもたらす人類への負の影響を考えて研究を断念するような必要はないと考える。アインシュタインが後年「広島、長崎を予見していたなら、1905 年の公式を破棄していただろう」と述べたと聞くが、それは研究成果が後世に果たした大きな役割を考えれば公式自体が悪いのではなく、研究がどう生かされるかの問題であろう。新たな真理の発見はそれがどのようなものであっても人類が生き続けていくための宝物だと信じる。核分裂の研究が原子爆弾を生み出した一方、貴重なエネルギーの供給方法も生み出してくれた。

環境問題が深刻化する中、我々は便利かどうかという次元を超えて、自らのライフスタイル、ワークスタイルを変えてでも、ICT を活用して環境負荷を低減していかなければならない。これまで人類は、新しい技術が出現するたびに、時間をかけてゆっくりとその技術が持つ陰の部分に適応してきた。それは、法的規制、モラル教育あるいは地域内での文化習慣上の自己規制などによって解決、克服されていた。バーチャルな世界を包含した ICT 時代においては、これまでと異なる新しい秩序、習慣、文化が必要とされている。当学会も社会学者、心理学者、政治学者などとのダイアログを推進する必要がある。今後の情報化社会の中で人類の更なる幸福を実現するため、ICT の潜在的能力をより良い方向に引き出すことが求められている。自由と便利さを担保しつつ、ICT 時代の秩序を保つために、人類の知恵が試されているともいえよう。